

乳幼児の発達と保育者のかかわりについて： 2歳児事例・4歳児事例からの考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 美佐 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4374

乳幼児の発達と保育者のかかわりについて — 2歳児事例・4歳児事例からの考察 —

児童教育学部 児童教育学科 中山 美佐

要旨：子どもの人間関係は、家庭の中で主に母親との愛着関係から築かれることが多い。また、幼児期になり保育所や幼稚園で友人関係やクラスの中で人間関係を深めていくことも多いだろう。2歳児・4歳の事例を挙げて、子どもの人間関係や保育者と子どもがかかわる中で生まれる愛着について考察する。2歳児の事例では、母親との愛着関係がなかなかうまく築けなかった子どもと保育者がかかわることで、子どもが安心して落ち着いた生活を過ごすことにより、母親が子どもとのかかわりを、再度持てるようになった事例、4歳児の事例ではクラスの中でお友達とのかかわりが難しかった子どもが、クラスのみならず過ごす中で起こった出来事から、人間関係を深めていった事例を挙げ、子どもの人間関係と保育者及び母親のかかわりについて考察を行う。

キーワード：人間関係、乳幼児、家庭支援、保育者、愛着、クラス運営

はじめに

子どもは家庭や地域、また保育所や幼稚園などの集団の中で多くのことを、吸収し学び、育っていく。特に乳幼児期は家庭の父母の影響を大きく受けると考えられる。生まれたばかりの乳児は様々な父母とのかかわりの中で、安心感や自己肯定感などの豊かな感情を深めていくと考えられる。しかし、家庭の中でその感情を得ることが難しい場合、保育所等の保育者にそれを求め、保育者が家庭で築きにくかった様々な感情を育てていくことも不可能ではないだろう。また、家庭の中で十分に愛され育ち豊かな感情を得て、子どもが保育所や幼稚園に入園し集団生活を体験すると、子どもの中には様々な葛藤も起こるのではないかと推察される。家庭の中では、おもちゃを自分の思うように使う、或いは、自分の想いを通すことができても、保育所などの集団の中で、自分の思い通りにはならないことも多いだろう。みんなで仲良くおもちゃを使うといった規範性の芽生えや、我慢すること、お友達の想いにも気付き、お友達の気持ちを理解することも、集団の中で保育者は育てていく必要があると考える。

1. 事例

(1) ① 2歳児A君の事例

2歳児A君は保育所に、一時保育として祖母の送迎で来ていた。A君は男児であり、言葉で伝えることも上手で、自分の想いを口に出して話すこともできた。

初めて保育所に来たとき、祖母から離れることも嫌がらず、すんなりと保育者のもとに来た。外遊びも、興味のあるものでどんどん遊んでいく姿があった。三輪車・滑り台・お砂場遊び等、保育者と一緒に遊ぶことが大好きで、たくさん話しながら、伸び伸びと遊んでいた。しかし、A君はお友達とのかかわりが嫌な様子で、保育者と2人だけで遊びたがった。他の一時保育の子ども達が互いにかかわりあい、遊べるようになっていく中でA君だけは、どうしても保育者だけと遊びたがり、保育者が他の子どもを膝に載せたり、抱っこしたりすることを嫌い、遊んでいても保育者を目で確認する様子も見られた。自分が砂場で興味のある遊びをしていても、保育者が他の子どもとかがかわると、走って戻ってきては「A君だけの先生だよ」と言い、膝に乗っている他の子どもを手で払いのけることもたびたびあった。保育者も初めは、「保育者に随分懐いている。保育所にも慣れて良かった」と感じていたが、あまりにも保育者を独り占めする様子が多かったため、気になるようになった。A君の送迎は祖母だけが行っていた。お家の様子も祖母からしか聞くことはなかった。A君には2歳年上の姉がいるが、姉は幼稚園に通っていた。「A君のお母さんが、たまに保育所にも来てくれたら嬉しいですが」と保育者がやんわりと祖母に話すといつも「A君のお母さんはちょっと疲れていてね。」と答えが返ってきた。一時保育も、母の疲れが理由だっただけに「それも仕方ない」と保育者

は思っていた。しかし、お昼寝の際には、A君の保育者への独占はさらに強くなり、保育者が他の子どもを寝かしつけることさえA君は大声で泣いて嫌がった。保育者は再度、祖母に詳しい話を聞いた。何度も聞いていくうちにA君の家の様子がわかってきた。「A君のお母さんは、本当に疲れていて、A君の姉の幼稚園の送迎と、園の子どものお母さんとの付き合いだけで、いっぱいになっているみたいです。A君のお母さんは姉妹で育っていて、男の子と一緒に遊ぶ経験もなかったようで、男の子の元気さにも疲れているみたいです。A君のことはほとんど私がしています。一緒にお風呂に入り、一緒に寝て、一緒にご飯を食べています。時々、A君は夜間に起きて『ママー』と言って泣くことがあるんです」と話してくれた。A君は母親との愛着関係を育むことが難しい状況にあった様子である。本当は、辛い時、しんどい時、悲しい時に戻っていく場所として、母親がいるはずであるが、その場所を見つけることがA君には難しいことであったと思われる。祖母との関係だけではA君の心の安定にしっかり繋げることが難しかったのであろう。保育所ではその話を受けて、園長・一時保育担当者・A君の母と面談を行った。やはり母親は「A君の子育てがしんどい。男の子がわからない。」と話した。「夜も寝られない。」と話し、涙を見せた。あまりにもしんどい様子から、A君の父親との面談も行った。園長・一時保育担当者・A君の父親との面談で、A君の母親が眠れていないこと、食欲も落ちているということから、病院の診察を勧めた。A君の父親も「このままではいけないと思っていた。」と話した。「A君は、家の中では元気すぎて、母親には男の子が理解できないのだと思う。」と話し、困った様子であった。保育者からは、まず、母親が心身共に元気になってもらうことが大切であること、園ではA君をしっかり預かるので、大丈夫だと伝えた。父親はホッとした顔で園を後にした。その後、母親が受診し少しゆっくりすることが必要であると、医師から話されたことについて連絡があった。保育者はA君を、何度となく抱きしめ、何度となく声をかけ、どんな時も保育者がいるから大丈夫であることを伝えた。少しずつA君は落ち着いてきた。A君と保育者の愛着関係が豊かになったと保育者が感じたのは、保育者が他の子どもを抱っこして「A君、先生、見てるよ」と声をかけたときA君が「見ててねー」と答えを返したときである。A君の安心は実感となり、自分の遊びを満足しながらできるようになってきたと考えられる。時を同じくして、A君の母親も、

少しずつ、A君のお迎えにも来るようになっていった。A君が安心して、十分に身体を動かし、伸び伸びと遊べるようになった頃、保育者は母親から「A君は家では、静かに座って遊ぶことも多くなり、しっかりご飯を食べ、お風呂に入ると朝まで、ぐっすり眠るようになって、なんだか育てやすくなりました。抱っこも私からするようになりました。」と話を聞くことができた。

②事例からの考察

A君は母親から見るともしかしたら「育てにくい」子どもだったのかもしれない。保育者から見るとよくいる男児であり、活発で元気な伸び伸びした子どもである。しかし、姉妹で育ち初めに生まれた子どもが女の子で母親にとって自分と同じように育つ子どもは「育てやすい」と思ったであろう。むしろ「当たり前」のように感じていたかもしれない。行動にも予想が付き「安心して育てられる子ども」だったのではないだろうか。

子どもの持つ、乳児の気質について菊野（2016）は「トーマスとチエスは『育てやすい子ども』『慣れにくい子ども』『難しい子ども』の3つの気質類型とそれ以外の子どもに分類している。『育てやすい子ども』とは、空腹の時間や睡眠時間などのリズムが規則的であるとか、機嫌がよい時間が長いなどの特徴がみられる。『慣れにくい子ども』とは違った環境ではなかなか慣れない、知らない人に出会うと恥ずかしがるなどの特徴がみられる。『難しい子ども』とは空腹の時間や睡眠時間などのリズムが不規則である。不機嫌になりやすい、変化に慣れにくいなどの特徴がある。それぞれの子どもの割合は、『育てやすい子ども』で約40%『慣れにくい子ども』で約15%『難しい子ども』で約10%であった。子どもの親との面接から、『難しい子ども』の親の子どもへの接し方や養育態度については、他の親と全く違っていなかった。このことは、これらの気質が親の養育態度とは関連しない生得的な傾向であることを示している」と述べている。A君が乳児であったとき、これらの子どものどこに属していたかは、確かめることはできない。育児に対するA君の母親の不安はどのように出てきたのだろうか。子育ては親と子が相互にかかわりあっていくものと考えられる。菊野は「母親にとって、『育てやすい子ども』は子育てが大変容易である。そのため、母親は自分の行っている子育てに自信を持ち、子育てにおいても心理的負担は少ない。育児不安も低いだろう。他方『慣れにくい子ども』は知らない環境や見知らぬ人と会う場

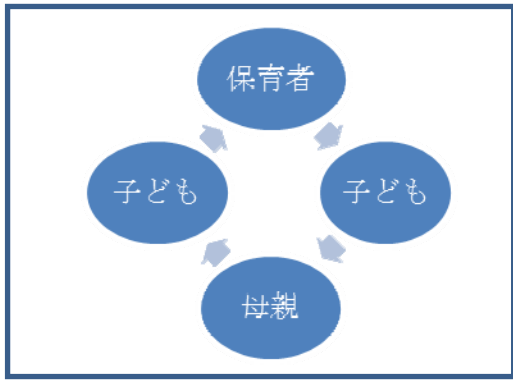


図1 子ども・母親・保育者の循環関係

合、子どもは引っ込み思案である。そのため、母親は外出したり、他人との接触の機会が、十分に取りにくくなることが多い²⁾と述べている。このように、乳児の気質と母親の考え方や行動が大きくかかわりあっているともしえるだろう。では、保育者はこのような親子とどのように接していけばよいのだろうか。

図1のように、様々な環境を中心とし、保育者が子どもを預かり保育していく中で、子どもにとって、自分を理解してくれる人、自分への理解を深めてくれる人、寄り添ってくれる人、何よりも子どもの安心な場所である、心のよりどころである人が、保育者として求められるところであろう。保育者と愛着関係を築くことで子どもは安心し、落ち着いた気持ちで園生活を送ることができるかと推測する。そして、家庭に戻り園生活で得た安定した気持ちを家に持って帰り、家での生活を過ごすことで、子どもを通して、母親も安定していくだろう。しんどい母親に何かをしてもらうのではなく、保育者と子どもがかかわることにより、子どもの安定へ、子どもから母親の安定へ、そして親子関係の安定に繋がることのできるのではないだろうか。A君の事例では親子の愛着について、また、保育者のかかわりについて考察できた事例である。図1のように保育者のかかわりから子どもの安定へ、子どもの安定から母親の安定へ、そしてそれが繰り返されて母親も子どもも安定していけると考えられる。

(2) ①4歳児B君の事例

B君は4歳男児で幼稚園の年中組である。力も強く、やりたいことはなんでもやる、お友達が困っていても自分の好きなことをやり通すといったところがある子どもで、伸び伸びと遊び、元気で興味を持つと、とことん遊びたい子どもである。B君は家では父母と3歳上の姉がいる4人家族である。母親からは「いうことを聞かなくて困っている。」「近隣のお友達のお母

さんからも苦情が来る」と保育者に相談があった。保育者は、B君は元気いっぱい伸び伸びと遊んでいること、しかし、時には、友達と遊んでいてブロックの貸し借りができにくいところがあり、喧嘩になれば力で勝つので、どうしても、ブロックを独り占めにしてしまうことを伝えた。母親は悩んでいるが、保育者にすれば、よくある子どもの発達段階であり、喧嘩もすれば仲直りもする、B君の「ブロックで一緒に遊ぼう」「貸してあげる」という時期も必ず来るであろうと予測をしていた。そこで、もう少し様子を見ましよう、と母親には伝え、B君の様子を見ていた。保育者にとって子ども同士の人間関係の支援は黙って時を待つ場合もあれば、意図的に中に入っていく場合もあるだろう。B君の場合は、何度か保育者が「お友達は、ブロックを貸してもらえなかったらどんな気持ちだろう。」「貸してあげて。」「みんなのブロックでしょ。」とB君に注意をし、何とか友達にブロックを貸して、一緒に遊べるようにと言葉掛けていた。しかし、保育者はB君の本当の思いまでは寄り添っていないことに気が付いた。

具体的には、コルトハーヘン（2010）の省察モデルに当てはめると図2のようになると考えられる、まず、①B君に「貸してあげて」と話してみる。②B君は「いや」と答え、貸さない行動をした。その後、保育者はB君の様子を観察した。どんどんブロックでロボットを作っていく。迷いながら、試しながら色を変えながら考えて試行錯誤を繰り返している。③B君は自分のオリジナルのロボットを自分の力で作りたいて考えていることがわかる。④保育者は違うコーナーにブロックコーナーを作ってみた。⑤B君はそのブロックも使い、一生懸命に試行錯誤を繰り返し、ロボットを作る。ブロックで自分の考えたロボットを作ることは、今、B君にとってとても大切なことであり、い

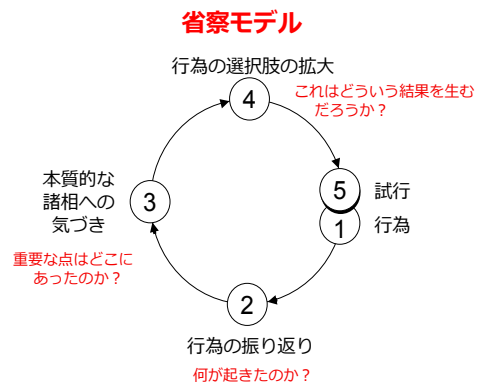


図2 B君の省察モデル

じわるで貸したくないのではなく、どうしてもブロックが必要なのだとわかる。

大きなロボットを作りたい、そのためにいろんな形、色、つなぎ目が必要であり、そのことで頭がいっぱいになっている。しかし、そのためにB君がすべてのブロックを独り占めしてもいいわけではない。保育者の中に葛藤があった。無藤（2011）は「保育は集団のなかで子ども一人ひとりの自己発揮を援助する営みである。そのためには一人一人の子どもをよく理解することが欠かせない。集団に目を向けるあまりに、一人ひとりの要求に気付かなかったり、集団に馴染めない子どもに対して否定的な見方をしてしまうことがある。そのような見方を保育者がしてしまうと、知らず知らずのうちにその子どもとかかわるなかで行動や態度として表れてしまうことがある。そのような保育者の態度に子どもは敏感であり、保育者や園に対して愛情や安心、安全感を抱くことができず、よりいっそうなじめなくなってしまうかもしれない。一人ひとりの子どもをより共感的に理解し、必要とされている援助をしていくことによって、保育者は信頼の対象となるだろう」³と述べている。保育者の中でみんなと仲良く遊んで欲しい気持ちが大くなり、全体の姿を見ることにより、個の子どもの本当にしたいことに気付かなかったともいえるだろう。このようにクラス全体と個の子どもについて保育者が悩んでいる時期に、遠足があった。お芋ほりをしに行くことになった。B君も含め、みんなはとても喜び、みんなでお芋を掘り、収穫を喜び、それぞれに持った袋をお芋でいっぱいにしていった。子どもの歓声があがり、子ども達も満足しながら、楽しんでお芋ほりをしていた。しかし、急にB君が泣き出した。見ると大きな芋虫がうねうねと動いていた。大人の親指ほどもある芋虫がいる中でB君は思いきり泣いて保育者にくっついてきた。「先生、怖いよ。」Bくんは泣きながら保育者に言った。保育者はB君の手をしっかりと握り、「大丈夫だよ。もう少しであっちに行くね。」と言うと、ホッとしたような顔を見せた。涙を拭きながら「もう、いない？」と確認した。B君がみんなの前で泣いたことは今までなかった。子ども達もびっくりした様子で「Bくん、泣いたの？」「B君、怖いの？」「もう、あっちへ行ったよ。」「一緒にお芋を掘ろうよ。」と次々と声が出た。B君はためらいながらも「うん」と言いながら、お友達のところに戻っていった。初めは恐る恐る掘り、お芋が出てきたら、どんどん掘り進められるようになり、お芋が出ると、さっきのことは忘れたかのように「あっ

た」「おっきい」とお芋ほりを楽しんだ。お友達から「良かったね。」「大きいのが掘れたね。」と話しかけられると、B君は嬉しそうに「うんうん。」と答えた。その日、保育者は今日あった出来事について母親に伝えた。B君の様子が降園時になると少し元気がないように思えたためである。初めてみんなの前で泣いたことに対して、B君は傷ついていないだろうか。明日も、いつもの元気なB君で登園できるだろうかと心配していた。翌日、B君は、いつものように元気に登園してきた。「昨日のお芋ほり、楽しかった。」そういつついつものようにブロックで遊び始めた。「B君、ブロック貸して。」とC男が言った時、B君は、笑顔で「いいよ。」と言った。自分の作りかけのブロックを見ながら「このブロックはどう？」「これだったら使っていていいよ。」とC男に手渡した。C男はびっくりする様子もなく「これも、使っていていい？」と別のブロックを指さした。「いいよ。」とB君は自分の製作を進めながら答えた。2人別々に、自分の製作を楽しんだ。保育者は何も言わず、2人の様子を見ていた。B君はこの日からブロックをお友達に貸せるようになった。

②事例からの考察

B君のお芋ほりでの経験は自分を振り返り、泣いた自分に優しくしてくれた友達への思い、或いは、自分ひとりだけがブロックを使っているのかという思いに繋がったのかもしれない。また、B君が一人の成長過程で「貸す」ということができたのではなくクラスのみんなのかかわりの中で成長し「貸す」ということができたのではないだろうか。自分のオリジナルのロボットを工夫して、考えて作りたいという思いと、お友達にも貸してあげたいという思いは、B君の中で、葛藤したであろう。しかし、B君は、友達にブロックを貸す方を選んだ。自分のオリジナルのロボットづくりが嫌になったのではないと推察される。B君の中で、作りたい気持ちと、自分だけがブロックを使っているのかという気持ちが交錯したと考えられる。保育者が問いかけるのではなく、また、保育者が子どもの間に入るのでもなく、子ども同士のかかわりから、B君の心の育ちがあったのではないだろうか。個々の成長段階は様々であるが、クラスの中で、何かをきっかけに、友達の大切さや、友達のやさしさに触れ、人間関係を自然に構築することができることもあると考えられる。

総合考察

子どもの成長は年齢や月齢によって、また、個人差

や環境によっても勿論、違う。事例からもこのことは読み取れるであろう。事例①の2歳のA君にとって安心して自分を解放できるところ、心の安心できる場所は保育者だったのかもしれない。家の中では存分に自分を出し、言いたいことを言い、好きなことをして伸び伸びと過ごせる心の居場所を見つけることが難しかったと推察される。遠藤（2017）は「怖くて不安なときにしっかりくっつくことができると『もう安全だ、大丈夫だ』という気持ちを子どもは持つようになります。そして、これを特定の大人との間で、何回も繰り返し経験すると、今度はあの人のところへ行けば『絶対、大丈夫だ』と感ずることができるようになります。一回一回の安全感的蓄積により、今度は保護してもらえることへの確かな見通しが子どもの発達にとっては大変重要なものになります。『何かあったときは、あそこへ行けば絶対大丈夫』、あるいは『〇〇先生に向かってギャーと泣けば、先生はすぐに自分のところに来てくれるはず』というような見通しがもてるということは、その特定の相手と情緒的な絆によって結ばれている関係が形成されることを意味します。そして、やがて子どもはその特定の大人と心理的につながりながら、やり取りをしていくのです。』⁴と述べている。図3のように、子どもの心理的な独り立ちとは、大人とのかかわりが大きく影響すると考える。保育者と情緒的な絆でつながっていれば、A君は、自然と気持ちを落ち着かせて家でも過ごせ、お母さんも落ち着いたA君と向き合っ、愛情を注ぐことも難しくなくなると考えられる。また上田（2002）は「保育者や幼稚園の保育者は、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者にもなり得るし、第一愛着対象者としての愛着関係が不安定な乳幼児が、こういった代理としての愛着対象者との間に愛着関係を形成させて安定させることができれば、その愛着対象者との愛着関係を築いていくことができると考えられる」⁶と述べている。また上田（2002）は「第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳幼児について、保育者は、第一愛着対象者の代理としての愛着対象者となり得るのみではなく、乳幼児と第一愛着対象者との関係を改善させる仲立ちともなり得る重要な人物であると考えられる」⁷とも述べている。2歳児のA君の事例は保育者が第一愛着者の代理となり、また、そのことにより第一愛着者との関係を仲立ちすることができた事例と考えられる。

また、事例②のように、4歳児が一人で遊ぶことから仲間と一緒に遊ぶ時期になるとき起こるおもちゃの貸し借りは、大人の中でのみ遊んでいては経験できな

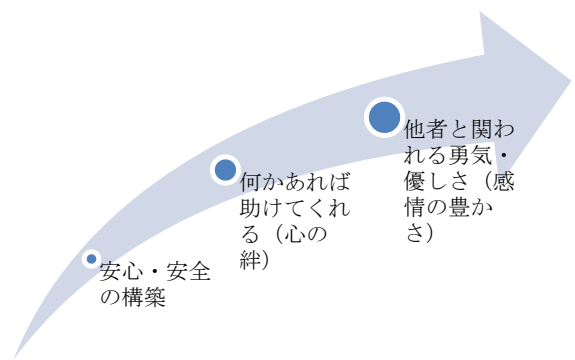


図3 子どもの心理的な独り立ち

いことが多く、子どもの中での葛藤場面もあると考えられる。この事例の場合、保育者はB君に対し、はじめは注意したり、他の子どもに貸してあげるように声掛けをしたりしているが、その後にB君を深く観察し、B君の今の様子を理解しようとしている。そこから、B君の「作り上げたい気持ち」を読み取り、様子を見るという保育を行った。B君にとって保育者は「自分を理解してくれる大人」であったと考える。保育者がずっとB君の理解を深めないまま、「ブロックを貸す」ことを促せばかりいたら、B君にとって保育者は自分をわかってくれない大人として、認識したのであろう。B君にとってのお芋ほりの場面は恥ずかしかったことで終わらず、お友達の気持ちを受け止め、自分も優しくありたいと思えた経験だったのではないだろうか。保育者が個々の子どもに寄り添い、感情での絆を持つことにより、クラスみんなの感情も落ち着き、子ども同士での遊びも、より豊かになると推察される。図4のように、子どもは特定の安心感を持つ特定の大人がいると、そこから、様々な経験をしに出掛ける。そしてそれを見ていてくれることにより、安心して冒険する。次に待っていてくれると信じて出かけられる。怖いことがあれば守ってくれると思うから

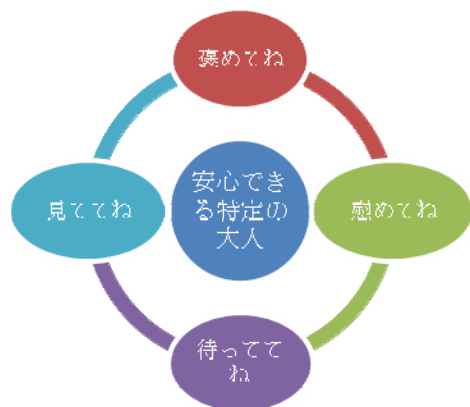


図4 子どもの安全なサークル

経験しようとする。

遠藤（2017）は安全の輪について『安全の輪』に描かれていることは、日常生活で頻繁にみられる子どもの姿です。また、子どもの発達と、養育者の関り方の基本でもあります。ここで注意したいことは、養育者は基本的にどっしりと構え、少し離れたところから見守る存在にいるということです。言い換えれば、子どもが何か不快な思いをしたり、つらい気持ちになったりしないかと、絶えず気にかけて子どもの後をついて歩くようなことはしないということです⁵⁾と述べている。子どもにとって、安全基地がしっかりしていれば、自然と、自分で歩き出すことも、新しい経験をすることもできるようになると考える。ややともすると、子どもが怪我をしないように、怖い思いをしないようにと、大人が子どもにくっついて離れなかったり、経験する前から止めることもあるかもしれない。喧嘩をしてはいけないと、おもちゃも必要以上に、たくさん用意しておくこともあるかもしれない。しかし、子どもの人間関係は根底に安全基地さえあれば、多くの経験を学びに変えていくことができると考えられる。そして、子どもの中で学び、友達を思い遣ったり、時には我慢したり、約束したり、譲ったりできるようになるだろう。何よりも、経験することが大切であると考えられる。幼保連携型認定こども園・保育要領（内閣府2018）では「人間関係1ねらい（2）身近な人と親しみ、かかわりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ。2内容（1）先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。（5）友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。（6）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。（7）友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。（10）友達との関わりを深め、思いやりを持つ。（12）共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。」⁸⁾と挙げられている。友達と一緒に楽しく遊ぶことは、決して人間関係のみに絞られて考えられたり、受け止められるものではない。園での生活そのものの中から、子ども達はすべての環境から学んでいくものと考えられる。しかし、子どもが保育者を信頼していなければ、或いは、安心できる人と捉えられていなければ、子どもの学びはとても薄いものになると推察する。子どもが安心して、様々なことを経験すること、様々なことを自らしてみることにより、保育者の暖かいまなざしや、言葉を通して、考えてみることも、反省することもできると思われる。B君の事例のように保育者がB君を

理解し、様子を見る、待ってみることも、B君自身が気付きお友達の気持ちを理解できたことに繋がったと考えられる。また、保育者は子どもを観察し、子どもの気持ちを汲み取り、寄り添いながらも、子どもが健やかに育つように考え、時には環境を変えたり、言葉かけを変えたり試行錯誤しながら子どもと向き合う必要があると考えられる。保育者は個々の発達の違いを理解しながら、また、個々の家庭の違いを観察しながら何度も振り返り、子どもの育ちに役立てる立場でなくてはならない。子どもにとって安心の基地、心の居場所であることは必要だと考えられる。

参考文献

1. F・コルトハーヘン編、武田信子監訳（2010）『教師教育学—理論と実践をつなぐアリスティック・アプローチ』学文社
2. 内閣府『文部科学省・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜原本＞』（2017）（株）チャイルド本社

注

- 1) 菊野春雄（2016）『乳幼児の発達心理学』（株）北大路書房pp55-56
- 2) 同上pp58
- 3) 無藤隆（2011）『事例で学ぶ保育内容—人間関係』シナノ印刷（株）p182
- 4) 遠藤敏彦（2017）『赤ちゃんの発達とアタッチメント』（株）ひとなる書房pp63-64
- 5) 同上p72
- 6) 上田七生（2002）「広島大学大学院教育学研究科紀要」第三部 第51号 p359
- 7) 同上 p360
- 8) 内閣府『文部科学省・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜原本＞』（2017）（株）チャイルド本社pp16-17

本稿は、2014年、関西教育学会にて発表した原稿、及び2017年、日本保育者養成学会ポスター発表に修正を加えたものである。

謝辞

本稿の作成にあたり、御助言、御指導くださった大阪総合保育大学大学院の渡辺俊太郎先生に深く感謝いたします。